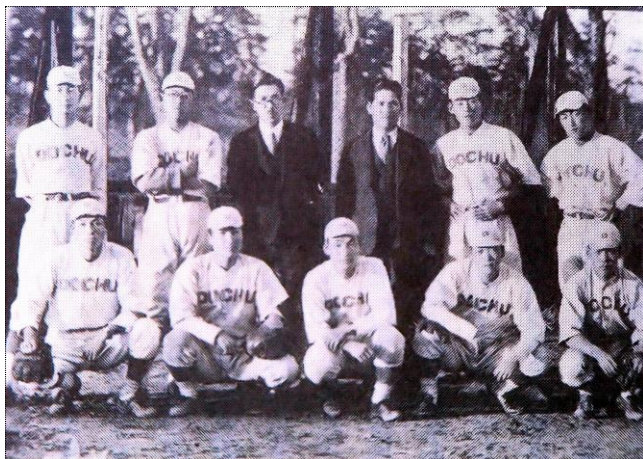




進修同窓会 HP にアクセス



「中38回野球部メンバー」

『中38回卒業アルバム』より

土浦の洪水6 ～洪水余話～ (霞ヶ浦その33)

1938[昭和13]年7月23日午後6時、排水作業が完了。土浦町民はようやく大地の上で暮らせるようになりましたが、町内の復旧には、さらに多くの時間を要しました。土浦中学では、被災を免れた生徒たちが郵便配達や校内に避難した罹災民に対する援助などの労力奉仕を行っていましたが、7月20日に鹿島神社境内で終業式が行われ、夏休みに入りました。24日には避難民が全員退去し、28、29日には校舎の大消毒が実施されました。

敬称を略し、旧字体は新字体に改めました。また、引用文中の【 】内は筆者による注記です。

復旧作業

保立食堂店主保立俊一(中31回)は、復旧作業の様子を「今と昔 洪水と土浦」(『水郷つちうら回想』所収)の中で次のように記しています。

「町の周囲を高台にかこまれ、東方を常磐線の鉄道線にかこまれた盆のような土浦の町は、水のはけ口が無い。川口の閘門(こもん)の処に排水ポンプが取付けられて排水をしたがはかどらない。結局三週間以上町は水の下になった。夏の暑さに腐った水の悪臭の中でゴミ掃除がはじまった。濡れた畳が町角に積まれる。仕方無いので消防車に積んでは桜川に流した。今考えるとずいぶん無茶なことをしたと思うが当時はそれしか方法が考えられなかったのである。ゴミも川に流した。濡れた畳の重かったことは今も思い出に残る一つである。水戸の工兵隊の鉄舟や赤十字の救護班等、救護活動を受けながら町の復興活動が進められ、一ヵ月かかってやつと復旧した。」

保立たちの中城町青年団をはじめとする土浦町民は、未だかつて経験したことのない自然の猛威に驚きながらも、一ヶ月もの間、泥水に浸かった我が町の復旧活動に無我夢中の日々を過ごしました。

土浦高等女学校での後片付け

6月30日から臨時休校を余儀なくされていた土浦高等女学校(現土浦二高)では、7月30日ようやく活動を再開しました。1ヶ月ぶりに登校した生徒たちは、予防接種や校舎内外の清掃など、洪水の後始末に追われました。高19回糸賀茂男の母、糸賀(旧姓福田)富美(当時、土浦高女2年)は、その様子を次のように書いています。

7月29日(金) 晴

起床6時 就褥(しゆく)床を敷いて寝ること19時

「明日学校だと云ふので朝からいろいろ始末をしました。靴をみがく、ブラウスを洗濯、靴下のつぎ、スカートの手入れ等、又髪洗ひ、つめ切りからすっかりして終わりました。清々しい気持ちになりました。……。」

7月30日(土) 晴

起床5時 就褥9時
「洪水後」始めて学校に行きました。水害の後はまだかなりきたなくなつて居りました。畳等や綿等がたくさんすててあり、ぶん／＼にほつて居りました。どんなに人々が苦しんだかがよく想はれました。学校に行きますと上ぐつはまだぼしや／＼でとてもはげず下くつのみ、居りました。

外朝礼にて国旗掲揚、宮城(きやうじょう)皇居)よう(遙)拜を致しました。講堂に入ってから新任式(地理科の佐藤正男先生)及び終業式が行はれましたが一番始めに勅諭(ちくゆ)を奉読(ほうどく)致しました。そして北支事変(日中戦争)一周年記念のお話がありました。又水害についても御座居りました。飯塚先生より掃除の注意がありました。それから各々食堂に入つて大掃除に取り掛りました。

ひどいごみが有りました。終礼(しゆうれい)級長選挙、水害調査、夏休み中の衛生等についてお話が有りました。又チフスの予防注射は誰も必ずする事と言はれました。私等伝染病等に関係ない安全な土地に生まれませんでしたので一度も注射等した事ありませんので恐い様な気がしてなりません。又赤い(痢)の方は内服ワクチンにした方が良いとの事でした。

【夏休みの8月】一日から二十日までで登校する日は十二日でした。注射をした人は六日にも来る事

終りに消毒液で手を洗ひました。今から何時も消毒液で洗ふやうにして衛生に気をつけるとの事でした。安全な所だと云つて油断せず一層衛生に注意させよう。」

7月31日(日) 曇

起床5時 就褥10時

「内朝礼で校長先生より水害についていろいろお話が有りました。……。真鍋や其の他二箇村へは勤労奉仕に行くと此の間におとらず立派にやってもらひたひとのお話がございました。椎名先生

から購買の方に帽子が来たから頼んだ人はとりに来る事、飯塚先生より上ぐつと予防注射、内服ワクチンについている／＼と御注意が有りました。それから作業配当をなさいました。十人は外へ行って残りの人はそれぞれ分担区域内の掃除をしました。終礼(しゆうれい)六月分の出席を調べました。放課後一時より注射が有りましたが私は飲薬をしましたのでやりませんでした。明日から有益に暮らさせよう。」



「土浦高女正門前」

『尚綱百年(土浦高女・土浦二高百年の歩み)』より

真鍋台の土浦中学では、避難民が退去した後、校舎の大消毒だけで済みました。1ヶ月余も泥水に浸かっていた土浦高女の後片付けは大変だったようです。

野球部無念

この年の野球部は、5年生の豪腕結束英(中38回 旧職員・英語)投手を擁し、茨城中学(現茨城高校)、茨城工業(現水戸工業高校)・水戸商業(現水戸商業高校)とともに、優勝候補の一角に挙げられていました。そのため、5月30日より6日間、法政大学野球部主将鶴岡一人三塁手(のち南海ホークス選手・監督。一軍監督として通算177勝を挙げ、プロ野球史上最勝監督としても知られる。また、勝率.609は歴代監督の中で随一である。)を招いて、コーチを受け、星光り月照る夕刻まで、汗と埃にまみれて白球を追い追いました。

その後、6月5日(日)水戸中学(現水戸一高 15-9)、6月12日竜ヶ崎中学(現竜ヶ崎一高 9-5)、6月19日那珂湊商業(現那珂湊高校 1-1)、6月26日茨城中学(1-7)、下館商業(現下館一高 4-3)と練習試合を重ね、大会に向けて懸命の努力を続けてい

また、7月に総仕上げの練習を行い、大会に備えようとしていた部員たちでしたが、6月29日からの豪雨は、一夜にして土浦を濁水の中に沈めてしま

部員たちは、学校に行くどころか、日々の生活もままならず、練習は全くできなくなりまし

それでも、部員たちは決然と大会に参加し、7月22日、悲愴な覚悟で全国中学校野球大会(現全国高等学校野球選手権大会)茨城県大会1回戦に臨みまし

「我等が如何にか」に水禍を蒙りたりと雖も、亀ヶ丘に学ぶ亀城男子。仮令【ない】練習意の如くならず、技量に於て多少不足未熟なる点があるとするも、日夜培はれた負けじ魂——男子の意気に於ては何人にも劣らぬものあり。水禍に喘ぐ大土浦の復興の魁【さき舟】にもならばこれ幸いなり。いでや土中スピリットを以て試合を行はん。」(1939「昭和14」年3月発行『進修第42号』「野球部報」)との意気込みで、下館商業と対戦。結束投手が3安打15奪三振の力投を見せ、2-0で快勝。「明日こそ勝たねばならぬ。如何にしても勝たねばならぬ。」と、部員一同深く誓いつつ、定宿の鈴木屋旅館に引き上げまし

翌23日は、優勝候補筆頭の茨城中学との対戦。その戦いを5年生一墨手説田泰助(中学38回)は、同じ「野球部報」に次のように記しています。

「明くれば二十三日、本日こそ宿敵、優勝候補と自他共に誇る茨城中学を打倒すべき日なり。彼は超中学級の強剛揃ひ。敵は打撃率正に三割五分と強打を誇る。然れども何条【なんじょう】(反語「何でふ」)どうして「彼を恐れんや。我には緻密、深遠なる作戦あり。何事をも貫き通す熱あり、気あり。」

彼を県北の雄と云はんか。我は県南の王ならん。出場に先立ち、鈴木屋旅館階上大広間に於て、我等の大先輩水中【水戸中学】教諭富岡【良夫】【中3回】先生の熱涙ほとばしる激励の言葉を賜はり、次いで部長の松丸【角治】英語【先生より】「先輩石岡町出身、故手塚【正彦】少尉【中23回】が銃剣を以てしては如何とも陥【おと】し難い敵トーチカ【機関銃や砲などを備えた、コンクリート製の堅固な小型防陣地】の銃口を、肉弾を以て蓋【おほ】ひ、自らは敵弾に粉碎されながらも、味方の突撃路を作りたる如き勇壮、果敢、悲壮極りなき事実を胸に刻み出撃せよ、勝敗は敢て問はず。負けても良い。唯力一杯奮闘せよ。正々堂々後日悔を残す事なき様戦はれん事を望む」との御言葉を頂き、勇気凛々【りんげん】勇ましいさま【】として出場す。

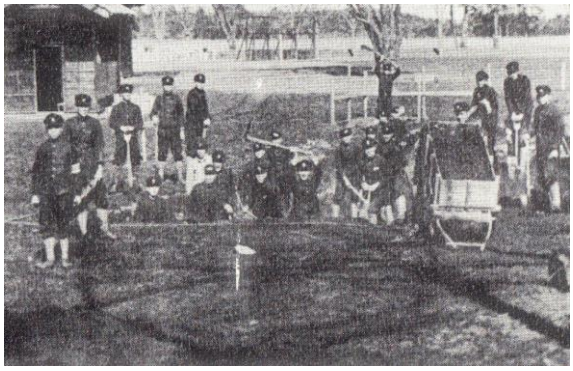
愈々【いよいよ】試合開始—これ程幸ひなスタートがあるうか? 敵山崎投手不調の間に早くも二点を先取—結果投手昨日に増した好調。前半は殆んどシューティングと云はんか、寧ろ敵を圧したる形勢—これならばと許り、我々は一丸となつて突進した。チャンスは悉く掴【つか】んでものにした。嗚呼、然しながら、今更こゝに水禍による練習不足のためと言はゞ負け惜しみと聞ゆるであらうが、それに依り彼に一步の長を与へたのである。 十四対六我々は遂に敗退を余儀なくせられた。万事休す。— 強剛茨城中学に対し、決死の意気を以て臨んだ土浦中学は、2回までに5点を入れ、応援団を狂喜させましたが、中盤以降、練習不足のため球威の落ちた結束投手が茨中打線に捕まり、無念の敗退となりました。また、説田は、前掲「野球部報」の中で、 「併【あ】し作【な】ら如何【いか】せむ天魔の禍ひ、未曾有の大洪水の為七月以来全く練習不能もやむかたなく、大事な最後の総仕上げを見る事なく、未完成譜を奏でつゝ終【つい】に我が覇權の夢ははかなくも春雪の如く消え去つた。」

と、その悔しさを吐露しています。

- ※土浦中学メンバー(○印は主将) 投手 結束 英 捕手 大久保 康 一塁 説田 泰助 二塁 深谷 豊太郎 三塁 井上 敏 遊撃 ○内田 幸三郎 左翼 根本 潤一 中堅 飯田 忠 右翼 榎戸 茂 (以上、何れも5年) 控え 小坂 慎一・大島 甲子雄・齋藤 秀雄・永井 三郎・湯原 忠雄・宮本 直次・小林 平一・吉水 壽雄・平岡 武夫

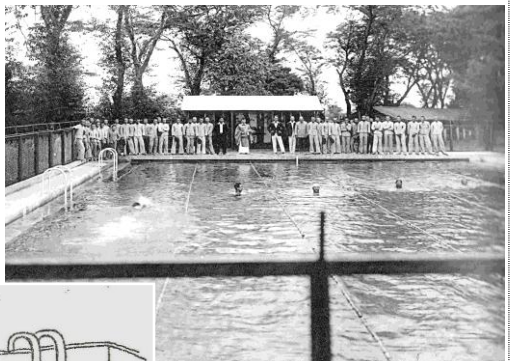
※茨城中学は、準決勝で水戸商業を5-4、決勝で茨城工業を9-3で下し、優勝。甲子園へは北関東大会(茨城・栃木・群馬)を制した高崎商が会場し、ベスト4に入りました。

プール開き



「プール工事」での勤労奉仕 『中37回卒業アルバム』より

1935「昭和10」年、霞ヶ浦の湖岸を整備されたために、ボート部が廃部となりました。その代わりに校内にプールが造られることになり(詳細は後述します)、「昭和13」年4月、建設が始まりました。 1938「昭和13」年4月、建設が始まりました。 全校生徒が「作業」の時間に円匙(えびシヤベル)で掘り、土砂をもつこ(注)で運び出した後、業者の手で完成されました。 7月には、全校を挙げ、プール開きを祝う予定でしたが、大洪水で延期となり、プールは、避難民の洗濯場となりました。



「プール開き」 『中37回卒業アルバム』より

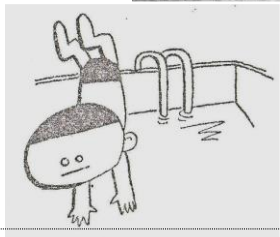


イラスト プール開き

8月20日、学校がようやく再開され、8月22日に、プール開きが中條祐宜【むかし】神職の職称の1つ【】の手でさきやかに行われまし。1時限目に宗光奎太郎校長とその他手隙【てま】の職員、5年甲組生徒全員が参列して、修祓【しゅうお】お祓い【】式を挙行。終わって、校長、水田清恵水泳部長(英語)、大塚守雄副部長(漢文)、生徒代表2名が入水式を行い、午後1時から3時まで、希望する生徒には水泳が許可されました。

(注)もっこ(巻)

縄や竹・蔓(つる)を編んで作った、土砂や肥料・農作物を運ぶための道具。人が担いだり、背負ったり、手で持ったりして使ったり、戦前までの土木工事では、もっこに土をいっばい入れ、棒で担いで運んでいた。土木工事は大変な仕事で、ほとんど人の力で行われていた。 ※前号に載録した松丸角治先生の書簡の中に、 「……蚤や虱の発生をみるに至り、DDTの粉末を頭からかけて消毒する役まで仰せつかることにになりました。……」との記述がありましたが、「DDT」は、戦後、アメリカ軍が持ち込んだもので、昭和13年当時は、一般には除虫菊を原料とした殺虫剤が使われていた。確認を不十分であったことをお詫びし、訂正いたします。(高21回 松井泰寿)